

BOOK REVIEW

脳卒中患者だった理学療法士が伝えたい、本当のこと

はじめに、本書は決して“理学療法士だけの本”ではない（タイトルに“理学療法士”と記されているために他職種には一見して“関係ないや！”といった誤解を与えるのではないかと心配）ので、ぜひ、医師・看護師含め、すべてのリハ関係者に推薦したい本であることを強調しておきたい。

著者はプロボクサーを目指していた23歳の時、練習中に脳卒中（左視床穿通動脈閉塞による視床梗塞）となり、右運動麻痺・感覚障害・運動失調・高次脳機能障害などの障がいを負った。その後、なおプロボクサーの夢を追い求め、障がいを克服する努力を重ねたが、プロテストで失格、挫折、目標を見失うといった紆余曲折の後、ついに30歳で脳卒中経験者兼理学療法士（著者記述）となり、現在は回復期リハ病棟で勤務している現役のリハ専門職である。

本書のPart 1では本人が脳卒中で倒れてからの不安・心情・葛藤と主観として自らの障がいをどのようにとらえ、どのように乗り越えようと努力したかが書かれている（このように書くと、よくある“脳卒中体験記ではないか！”という印象を与えそうだが、ところがどっこいである）。やはり著者は理学療法士。折々に抱いた主観に関して専門職としての視点で考察がしっかりと盛り込まれている。読んでみると、視床梗塞による感覚障害が単なる知覚低下などではないこと！、また一見すると麻痺は改善し、ADLも自立しているように評価できても、感覚障害が残存することで、運動にも重大な影響を及ぼしてくる！といった

ことが実感として伝わってくる。

Part 2では著者が経験した主だった障がい（運動麻痺、感覚障害、運動失調、高次脳機能障害）、そして抱いた主観に対して、より詳細な神経解剖学的考察が加えられている。非常にわかりやすく解説され、多くの専門職にとって苦手の脳神経解剖・機能をしっかり理解するうえで良い参考書となるろう。

正直「よくぞ、ここまで勉強したなー！」と思わず感服。またchapterの最後のほうでは、脳卒中経験者兼理学療法士として患者の心の内面（水面下の冰山）を推察することの大切さを訴えている。リハ専門職が患者にかかわるとき、しっかりと心情に寄り添い、障がいのありようを理解すること、またアプローチが押し売りにならず、患者が理解し、同意を得ることで、患者の能動性を引き出すという努力も大切と強調している。とても印象的である。また、入院中と退院後の実生活におけるギャップを入院中から埋める努力をすることも強調されているが、とても切実さが込もっており、再認識であった。

最後に、本書は脳卒中（障がい）経験者兼理学療法士（リハ専門職）だから書くことができた興味ある本である。そこで類似本として、脳科学者兼脳卒中経験者（ジル・ボルト・テイラー博士）が脳内出血で自ら脳が壊れた時の変化について詳述した『奇跡の脳 脳科学者の脳が壊れたとき』（新潮社、2012）を紹介する。本書読破後に、ぜひご参照あれ！



● 小林純也＝著

（四六／300頁／2,500円＋税／三輪書店／2017年）

評者

栗原正紀

長崎リハビリテーション病院 理事長、医師